

館蔵品紹介

春日曼荼羅図について

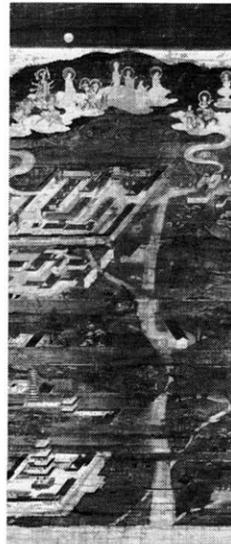
浄土教絵画の来迎図について考えていました時、とある切掛で再見することになった当館所蔵の春日曼荼羅図(室町時代)の裡に、まことに珍しい図柄が描かれているのに気が付きました。それと言いますのは、画面上部に配された諸仏の、その配置の珍しさです。ここでその部分の写真をよく見ていただきたいのです。私には、向かって左の白雲に乗った諸仏が右の白雲の仏たちに迎えられているように見えるのですが、如何でしょうか。これらの諸仏は春日神社の各社の本地仏を示したものと思われませんが、本地仏を配するに際して、このような形で描かれた春日曼荼羅を私は今まで見たことがありません。

本図の本地仏については『大和文華』二十号(昭和31年)に松村政雄氏の論文がありますが、それによりますと、本殿の中程から右端から釈迦、薬師、地藏、十一面観音、その後方の一群は、吉祥天と善膩子を左右に従えた双身の毘沙門天、それに弥勒と弁才天であり、更にその後には虎に乗った牛頭天と羽根をつけた二天が続いていると見られます。松村氏の調査によりますと、これらの諸仏は、一宮、二宮、三宮、四宮、及び榎本社、水屋社等の本地仏であるとのこと。これに対して、若宮から昇る雲に乗った諸仏は、先頭が文殊であり、その後が続くのは聖観音と大日如来であり、この文殊、聖観音、大日は凡て若宮の本地仏であるとのこと。松村氏の調査でわかりますように、春日神社の神仏習合の永い歴史において、各社の本地仏については種々な説がなされていたのでありますが、同一画面に諸説の本地仏を重複して描いた図は他に見られないものであり、この点こそ本図の最大の特徴である、と松村氏は指摘しておられます。

なるほど手元にある図録類を見ますと、確かに松村氏の指摘しておられるとおりであります。そう思いながら本図を見ていました時初めて私が気付いた諸仏の配置の問題が一層はっきりしてきたのであります。それは、先ず第一に、向かって左の白雲に乗った諸仏は本殿の春日四所明神の本地仏を中心にしたものであり、右の諸仏は若宮の本地仏を表わしていること、次に、本社の本地仏は上段に位置して右を向き、左を向いた若宮の本地仏と相対して描かれていて、明確に区別されている、ということでもあります。

春日神社の若宮信仰は、御神体の御蓋山(みかさやま)を山宮と仰ぎ、若宮を里宮とし、御旅所(おたびしょ)を田宮とするもので、農耕神をまつる古代からの祭祀の形態をよく伝承していると言われていいます。農耕の幸を願う人々は、春の初めに山宮にいます神々を里宮に迎え、そこで秋までの農耕を見守ってもらえるように祈るので。その意味で、御神体の山にある磐座(いわざ)が神の本来の座であり、里宮の磐座は仮の座と言うことが出来ましょう。春日神社の里宮である若宮は、その名の示すとおり、若々しい生命の生まれ変わりを象徴するものであり、若宮の祭祀は、山にいます神々の里への「みあれ」を願う、神降しの儀式を本来の姿としているのであります。

このように見て来ますならば、本図において、本社の本地仏と若宮の本地仏が明確に区別されて向き合い、若宮の本地仏が一段低い位置で本社の本地仏と相対する形は、本社の神々を若宮に迎える神降しの姿を表現したものと、そしてよいのではないのでしょうか。もしそう解してよいのなら、本図は、単に春日神社各社の本地仏を示そうとしたものではなく、本地仏を



部分

春日曼荼羅図 室町時代
絹本着色 66.0×30.3cm

以って、若宮信仰本来の神道的意味を表わしたものと考えられ、この点でもまことに珍しい春日曼荼羅だと考えられます。

本地仏や垂迹神を描きこんだ春日曼荼羅の数は多いのですが、それらの殆どが本地仏や垂迹神を並列して描くにとどまり、単に本地垂迹の考えを説明したものに過ぎません。そうした中で、本地仏が雲に乗って降りて来る形のもの、私の知り得た限りでは六例に過ぎず、その裡で、本社の本地仏と若宮のそれを相対するように描いたものは、二例だけです。(奈良国立博物館刊『春日曼荼羅』展図録の中の図版番号4と6)しかし、それらとて、両者を相対させるだけの表現に終わっていて、本図の如く、本社の本地仏を若宮のそれが迎える、と言った形のものはありません。仏教の仏や菩薩の威徳に頼った図様の多い中で、本地仏を以って、春日信仰の底にひそむ、日本古来の農耕神に対する信仰の姿を表現した本図は、数多くある春日曼荼羅の中にあって、まことに貴重なものと言えるのではないのでしょうか。

こう思ってこの春日曼荼羅を見ますと、春日の社頭は、淡い緑につつまれ、木々には白や薄紅の花が咲きほこっていて、今まさに自然の魂は生まれ変わり、若々しい生命が育たんとする勢いの裡にあります。たとえ春日野を見慣れた人達にしたところで、冬から春にかけての春日野の様がわりに立ち合う時は、それは幾度見ても目新しいものであるに違いありません。枯れていた芝が急に緑を帯び出し、やがて桜、馬酔木、藤が咲き継ぐ中で、風に光る新緑のもとに立つ者は、誰しも心のおどるのを禁じ得ません。その時、人々は、我知らず、新しい生命の再生を感じとっているのです。そして、こうしたことは、何も春日野に限ったことではありません。それは、日本人の誰もがよくよく知っている、あるがままの自然の姿なのです。

日本の神道が、こうした誰もが分ち持っている単純率直な心情にその根をしっかりとおろしている限り、それ本来の魅力は決して失われないだろうと、私には思われます。(早川聞多)